

## 異常な高値

原油価格は一月二五日に五〇ドル弱まで上昇したところで、またまた下落に転じ二月上旬には四五ドル強となった。

O P E C は市場には石油が余っていると見ていたが、一月三〇日の第一三四回 O P E C 臨時総会では高価格状態が継続していることもあって価格引き上げのためにさらに減産をするのは見合わせて“現在の生産上限を遵守する”という決議を行った。

ただ、その時同時にこれまで目標としていた二二ドルから二八ドルまでの価格帯を一時棚上げとすることも合わせて表明した。これは、昨二〇〇四年七月一五日以降、原油価格が四〇ドルを下回ったことが無かったことから、目標価格帯が非現実的になったとの判断に基づくものに過ぎなかったのだろうが、市場参加者の多くは O P E C がより高い価格目標を目指したものと解釈した。

そして、やがて、これも強気要因となって寄与して行くこととなる。

サウジでは昨年頻繁に起きたような大きなテロ事件は無く一月が過ぎリヤドの街は落ち着きを取り戻しつつあった。

一月も治安部隊のテロ対策は着実に進んでいた。

治安部隊は一月中旬にはリヤド市内にある低所得層の密集住宅地域を搜索し、一二月末に内務省前で発生した自爆テロに使用された車の後部座席を発見した。テロリストは、この後部座席を取り除いたところに大量の爆弾を仕掛けたのだった。同時に、通信設備、パソコン、弾薬、アバヤそれに多量の書類を押収した。

一五日の夜にはバカーのテロリスト宅を搜索し、そこにいたテロリストを逮捕した。

また、テロリストがインターネットカフェを情報交換、メッセージのアップロード、団体、政府及び国に対する脅迫発表等に使用していたことから、治安部隊はリヤド市内のインターネットカフェ三カ所を搜索した。

慎太郎、植木、イブラヒムの三人は久し振りにアル・コザ

マ・センターにあるイタリア料理店で石油談義などをすることにした。

この店の料理はメニューも豊富で味も本場イタリアに負けない本格的なものだったが、それだけに値段も高かった。

店の前に広がる独特な吹き抜けのある広場にもスパゲッティなどを作る調理スペースと二〇人程度の客席が設けられていた。三人は、この広場に置かれた四人掛けのテーブルの一つに座ることにした。

そこからは向かいにハッサンの店が良く見えた。

ふと見ると、店の前でハッサンが立ってこちらを見ていた。

慎太郎が手を振るとハッサンも手を振り返してきた。

植木、イブラヒムが、そのやりとりを興味深げに見ていたので慎太郎は彼が向かいに見える香水屋の主人であることを二人に教えてあげた。二人ともハッサンの店に気付いていて興味はあったが入ったことはなかったとのことだった。

石油談義では植木が口火を切った。

「原油価格はこここのところ低下してはいますが、未だ四五ド

ル程度の高い水準に止まっています。九〇年代には二〇ドル程度の水準が長い間続いていたのですから、僅かの間に一気にその二倍を優に超える高さに達したわけです。現在は、石油需要期だから仕方がないのかもしれませんが、それにしても高いですね。自分の給料として考えれば僅かの期間の内にも倍以上となった分けですから売る方は笑いが止まらない状態かもしれません。OPECが減産をしなければならぬほどの緩い需給情勢なのに価格が上昇しているのですから今はやはり異常としか言いようがありませんね」

植木は、いつもの通り異常な高値に溜め息をついた。

「給料が二倍になるというのは素晴らしいことではないですか。これから春先の不需要期へと向かうわけですが、イラクは相変わらずの混乱状態ですし、ベネズエラ、ナイジェリアと問題が多いですから暫らく高値が続くんじゃないでしょうかね。ことによると給料が三倍になるかもしれませんよ」

イブラヒムは高原油価格がインド経済に与える影響など

はそっちのけでそう言った。

そのようなことはダス石油ガス相に任しておけば良いと言った風で全くあっけらかんとしていた。

植木はイブラヒムの発言には構わず自説を続けた。

「それに、困ったことに米国エネルギー省、IEAそしてOPECなどが、一斉に石油需給タイト論を展開しているのです。これは、昨年中国、インド、それに米国での石油需要急増、非OPECの石油生産の伸び悩みなどをもとにして作成した石油需給見通しに基づくものなのですが、それが現在は石油が余っているのに高値を招く要因の一つになってしまったのです。まあ、真面目に見通しを作成しただけで悪気があるわけではないのですが、緊急時対応機関であるIEAが結果的に危機を煽(あお)るといいう皮肉な展開となってしまうました。OPECに至っては見通しではタイトと言いながら、実際の需給に合わせて更に減産をすると主張するものまで出るという始末です。本当に困った展開です」

慎太郎は、いつもの通りの植木、イブラヒムそれぞれの石油価格に対する考え方を聞きながら、これから不需要期に向かうとは言え商社にいるものの勘としては現在の高値が続くのではないかと考えていた。

「この間は、オサマ・ビン・ラディンが、イラクや湾岸諸国の石油施設を攻撃するようネットワークに指示を出したテロップが報道されて、中東では供給不安が高まって来ていますから暫らくは高値が続きそうですね。そのような高値の中でも、さすが世界経済は高い成長を維持しそうに見えます。石油高価格に対しては思ったより適応能力がありそうですね」

慎太郎の発言に対し、植木は、あくまで石油業界の長い経験から来る石油に対する思い入れの深い意見を述べた。

「私は原油価格が四〇ドルを超えるような状態が長く続けば必ず世界経済に悪影響をもたらすものと思っています。そして、それは、結局、石油需要を減退することになり産油国にも悪い影響を与えることになります。また、高価格が続いて世界中がより真剣に脱石油を考えるようになれば産油国に、より大きな問題を投げ掛けることになるでしょう。産油国も石油をより低い、より合理的な価格水準に止めるような努力をするべきだと私は思っています」

そして、また、いつもの通り異常な高価格を支える不当な要因への憤りをとうとうと捲(ま)くし立てた。

「原油価格が高くなって来ると、その理由付けに様々なことを唱える人が出て来て困りますね。分けがあって高くなっているのでしょうか何も無理に説明をつけなくても良いと思うのです・・・前にも言いましたが余剰能力不足の話もそうです。石油開発などの上流部門における不足についてはあまり強く言えませんが、石油精製・元売などの下流部門につい

て言えば余剰能力不足が高値の要因になっているとは決して言えないのです。むしろ、八〇年代から始まった血の滲(にじ)むような合理化、低コスト経営の帰結として余剰能力は少なくなるもので現在の余剰能力不足いや最小限の余剰能力は当然の帰結と言えるのではないでしょうか。上流部門だって余剰能力を持てばコストが高(かさ)むわけですから余剰能力を最小限にするように努めるでしょう。また、これまでに余剰能力を持っていたのはOPEC加盟の主要数力国だけです。それも石油需要増大を見込んで能力を高めたところに石油需要が急に減ってしまったため、たまたま余剰能力を抱えてしまっただけではなかったのではないのでしょうか。非OPECについて言えば、いつもフル生産を目指していたと言っているのだと思うのですが・・・」

「それに今回急に出てきた石油需給タイト論もおかしな話ですね。ここ数年の石油需給はそれほどタイトではなかったのです。例えば先行き需給タイトになると予想されても、それは懸念すべきことでは無く、むしろ望ましい自然なことでは、実は、タイトな需給こそが適正なことであると認識して焦ら

ないことが肝要なのではないでしょうか。余剰能力不足についても同じことが言えますね。懸念は禁物です。民間の石油在庫についてもそうです。今は在庫が多くなっていますが、コスト削減のためには在庫は最小限になる筈です。それを懸念してはいけませんね、」

「また、本当に石油が供給不足となればそれこそ石油危機になるわけですから、その時こそE Aの出番になるのではないのでしょうか。石油危機への対応はいつでも考えておかなければならぬことでしょう。この数年間でイラクの石油供給が不安定となり、ベネズエラでも大統領が国营石油会社との角逐で専門家を大量にパージしてしまったためになかなか前のような高水準の石油生産には戻れなくなってしまいました。それにナイジェリアでも労働争議や民族抗争が絶えません。しかしながら、このような中でも石油需給がバランスしてきているわけですから、徒に供給途絶を危惧しないことが重要なのではないのでしょうか」

植木は、心の中にもやもやしたものをいつも抱えていたように、それを晴らすためもあったのか一気に話した。

イブラヒムは植木の熱気に圧倒されて聞き役に回っていた。これまでの経験、知識からしても植木が真剣になればなるほど、そうならざるを得なかった。それは慎太郎も同じでやはり植木の熱気に圧倒されていた。

慎太郎は慌てて話題を変えてみることにした。

「植木さん、分かりました。仰る通りだと思いますが、もう少し市場の展開を見た後に、また、その議論を続けませんか。今日は、宜しければ、これからイブラヒムにハッジの模様などを聞きたいのですが、いかがでしょうか」

「そうそう、イブラヒムさんはハッジに行っていましたね。私もその話を聞きたいと思っていました。なにしろ、異教徒がメッカに入ることは許されませんので、是非、イブラヒムさんからハッジの模様を聞きたいですね」

幸い、植木は興味を示してくれた。イブラヒムも話したくてうずうずしていたようで、その話ならというわけで嬉々(きき)として話し始めた。なにしろ、今や、彼は皆からイブラヒムの上にハッジという言葉を冠して呼ばれることにな

ったわけで得意満面なのだ。

リヤドからハッジに出かけるには、ハッジ委員会主催の団体旅行に二五〇〇リヤル(約七万五〇〇〇円)の費用を払って参加するのが普通だ。ハッジに先立つウムラーの場合などには九〇リヤル(約二七〇〇円)などという超格安のパッケージツアーもある。皆、イスラムの精神に則り貧富の分け隔てなく同じ環境の下にハッジを行う。しかし、イブラヒムは、このような団体旅行を避け自分の車で出かけた。しかも、宿泊も五つ星クラスの超高級ホテルと同等な特別高級な施設に滞在した。イスラムの精神には全くそぐわないのだが、最近は金持ちを目当てにした特別な施設が続々とメッカ近郊に建設され利用客もうなぎ登りだった。

ハッジ期間中の滞在には一五万リヤル(約四五〇万円)以上を必要とし食事料金も二万五〇〇〇リヤルから一五万リヤルほどかかった。それだけに多数の警備員、ボーイなどが居て豪華この上ない待遇だった。食事も一流ホテル並みだった。また、モスクまでは高級車の送迎があり豪華な弁当も用

意されていた。さらに、ハッジの最後に行われる石投げの儀式用の石まで用意するというきめ細かさだった。最近、メツカでは、石拾いの手間を省くために石投げ用の石を販売するものまで出現していたので、これは気が利いたサービスだった。

慎太郎は、イブラヒムが金持ちであることはわかっていたが、高級外車も買えるようなお金をたった一回のハッジに費やしてしまうのには呆れていた。

しかし、それは何でも派手で貧乏人は嫌いというのを口ぐせのようにしていたイブラヒムにしてみれば当然のことだった。

ただし、一度(ひとたび)メツカで巡礼に入れば貴賤(きせん)の隔ては無くなる。

ハッジのクライマックスは、アラファトの丘に立ち、アラ  
ーに向かって祈る時だ。

「ラッバイカッターフンマ ラッバイカ(アッラーよ、私は  
御前におります。御前におります)」、

「ラッバイカッターフンマ(アッラーよ私は御前におりま  
す)」

そう唱えながら、無数の人々がアラファトの丘を登ってゆ  
く。イブラヒムも、その人の群れに混じって周囲の声そして  
自分の声に陶酔しながら丘を登った。

丘の上に立つと、その感激で涙を流すものが多かった。

イブラヒムは真摯(しんし)なモスレムではないと自覚し  
ていたが、この時ばかりは、その感動に巻き込まれ不思議な  
連帯感に目覚めていた。

イブラヒムは、見ず知らずの年老いたインド人と手に手を  
とって、

「ラッバイカッターフンマ ラッバイカ(アッラーよ、私は  
御前におります。御前におります)」、

「ラッバイカッターフンマ(アッラーよ私は御前におります)」

と繰り返していた。それは、丘の上に上るまで続いた。

丘を下りながら、その老人はイブラヒムに話しかけてきた。

「実は、私は、ヒンズー教徒の、ご主人様一家のお蔭で、このハッジに来れたのです。丘の上で私は、このご主人様一家のことも祈ってきました」

普段のイブラヒムなら、そんな老人はあっさりと無視したものだ。ハッジの時には全く別人のようになっている自分に驚いていた。ただひたすら老人の話を聞いていた。

「ご主人様は心の優しい方でした。異教徒の私を長い間随分と可愛がってくれました。それだけに、私も一生懸命ご一家に尽くしました」、

「生憎、数年前にそのご主人様はお亡くなりになってしまいました。そして、今回、私がハッジに行くことを奥様に告げると、奥様はハッジの費用として三〇万ルピー(約七八万円)を出してくれると言ってくれました。お聞きした時は嬉しか

ったですね。有り難くて涙が出ました。奥様によれば、それはご主人様のご遺言で奥様も兼ねがね私の奉公に報いたいと思っていたとのことでした」、

「なけなしのお金でハッジをしようと思っていましたから、本当に有り難いことでした」、

「私が長い間面倒を見た坊ちゃんも今はもう大きくなって働いていらっしやいます。この坊ちゃんもやはり良い方で、その奥様の話をお聞きになって自分が費用を負担したいと申し出たらしいのです。奥様は坊ちゃんが自分の受けた恩を忘れない、そのような優しい気持ちを持った人に育ったのが大変嬉しかったようでした」、

「しかし、結局、奥様は全額ご自分で負担してくれました。その奥様も残念なことに私がハッジに出る直前にお亡くなりになってしまいました」

男の目には涙が溢れていた。

イブラヒムは、いつしかその男の話に引き込まれていた。良い話だと思った。心が洗われた。

イブラヒムはインドの異教徒間の熾烈(しれつ)な争いを

良く知っていたので、それだけに、この話によけい心が動かされた。かつて、インドでは、ヒンズー教徒が大勢のモスレムを生きたまま焼き殺したこともあった。

イブラヒムは、この男の仕えたヒンズー教徒のように心の優しいものばかりならばこの世は平和になるのにとしみじみ思っていた。

慎太郎、植木もイブラヒムの話に心を動かされた。

そして、一体いつになったら、そんな心の優しい人達でこの地球が一杯になり争いが無くなるのだろうかと空しく考えていた。特に混乱の続く中東にいとその思いが強かった。たった一回のハッジでイブラヒムはまるで心を入れ替えた犯罪人のように敬虔なモスレムへと変貌していた。

今年は、巡礼の最後の日に豪雨があり大変だった。ジャマラット橋では傘の無いものが雨宿り先を求めて走り押し合い庄(へ)し合いとなった。二人が死亡し二五人が負傷した。

ハッジには約三〇〇万人という大勢の人々が押しかける

ので様々なことが起きる。

子供連れのハッジも多いので迷子も出るし盗難に合うものもいる。なにしろ普通の人達は、イブラヒムのように高級な施設に泊まるわけにはいかない。常に、そのような危険と隣り合わせだ。雨が降ると水溜(たまり)もでき衛生状態も悪化する。蚊が発生し伝染病にも感染する。今年是对症療法しかないデング熱も発生した。安い弁当、サンドイッチなどには食当りの危険もある。その辺りはハッジの模様を伝えるテレビの映像からは想像出来ないところだった。

慎太郎も、植木もイブラヒムがハッジの模様について事細かに語るのを興味深くいつまでも聞いていた。

サウジでは、めったに雨が降らないために排水設備が整っていない。降ると大変なことになる。大きな通りが冠水し車が立ち往生することもある。このハッジの時の豪雨はメッカだけではなくメディナ、ジエッダなどの西部地区一帯も襲った。メディナでは洪水のため八人が死亡、六人が行方不明と

なった。ジエツダでも二人が死亡した。

二月に入るとリヤドでも雷雨、集中豪雨が何度かあった。やはり直ぐに道路が水浸しになり車は立ち往生した。交通渋滞もあちらこちらで発生した。異常気象だった。

リヤドは沙漠の中の都市で冬には暖房が必要なほど寒くなるが二〇〇五年は寒さがより長く続いた。通常は三月に入ると急激に気温が上がり始め三月末には灼熱の国と化すものだが中旬になっても二〇度前後の日が続いていた。

サウジのテロはその後もなりを潜めていた。リヤドは一段と落ち着きを見せ始めていた。事件と言えば二月一三日にジエツダのアル・ラブワ地区で銃撃戦があっただけだった。

この銃撃戦はテロリストが潜伏しているとの市民の通報を受け治安部隊が同日午前六時にテロリストの住む住宅を取り囲み投降を呼びかけたがテロリストがこれに応じなか

ったために起きた。

銃撃戦の末、治安部隊はテロリスト一人を殺害、一人を負傷させ二人を逮捕した。治安部隊からも死者が一人出た。

治安部隊の一員がテロリストに捕まり盾にされた拳銃に同僚の治安部隊に撃たれてしまったのだ。警察官も五人負傷した。

また、市民も巻き添えになった。

テロリストと同じアパートに住んでいた家族三人が手上げて表に出たところをテロリストに後ろから銃撃され、母親が死亡、父親と四歳の子供が負傷し他に九人が負傷したのだった。

原油価格は、三月一五日に五五ドル、三月十七日に五六ドルを超えた。こうして、あっさりと史上最高値を更新してしまった。イブラヒムは、ハッジの時以上に嬉々としていた。植木は、あまりに長く続く異常さに声も無かった。四月四日には、さらに五七ドルを超えた。

この急激な原油価格上昇の背景の一つには、一九八〇年代の経営効率化、合理化の事情にも詳しく企業合併などの相談にも乗っていたアイスマンサクスの存在があった。

アイスマンサクスは、経営効率化、合理化を進めて行けば石油需給は最適なバランスになるなど全ての事情を知り尽くしている筈なのに、石油需給の逼迫により原油価格が一〇五ドルになるという見通しを発表したのだ。

これは強気要因を探していた投機家達の格好の材料となった。

植木は経済の動脈である原油がこのように投機対象となってしまうことに懸念を抱いていた。

より多くの利益を求めて投機資金が大量に石油先物市場

に流入すれば原油価格をより一層押し上げることになる。

そして、イブラヒムがかつてアイスマンサックスに居たことなど露知らず、アイスマンサックスには誠に困ったものなどといブラヒムの前で盛んに非難していた。

イブラヒムはとても自分はその出身ですなどとは言い出せなくなった。植木が、いつも通り原油価格が高騰を続ける現状を盛んに嘆いているのを冷や汗をかきながら、ただ黙って聞いていた。

思ったより寒さが長引いていたリヤドも、四月に入って、ようやく気温が急激に上昇し、朝でも三〇度弱と一段と中東らしくなった。しかし、その後は例年と異なり季節外れの雨が降るなどして一気に灼熱の国ということにはならなかった。天候の方も原油価格のように異常で不安定だった。

慎太郎は、時々、スルタンとレバノン料理の店に行っていたが、スルタンはこのような異常気象を今年は大変過ごしや

すいなどと言って嬉しがっていた。緑豊かなアルバハ出身のスルタンにしてみれば神の恵みだった。

四月に入ってからサウジ政府のテロ対策は熾烈を極めてきた。治安部隊とテロリストとの銃撃戦が各地で展開された。カシーム州アル・ラスにおける戦闘は三日間に渡る激しいものだった。

四月三日の午前八時に始まった治安部隊とテロリストとの間の銃撃戦は五日まで続いた。

このように戦闘が長引いたのはテロリストが三軒もの家に分かれて住み重装備をしていたからだ。テロリストはロケット弾まで使用した。

銃撃戦の間、周辺の全ての商店、学校は閉鎖された。

この銃撃戦でテロリスト一五人が射殺され六人が逮捕された。射殺されたものの中には最重要指名手配者が二人含まれていた。他方、治安部隊にも一四人の負傷者が出た。また、見物人も一人死亡した。治安部隊は武器弾薬、書類、二五万

リヤルを超える現金そして沢山のアバヤを押収した。

四月六日午前九時には、リヤド南部の工業地帯で治安部隊が、テロリストの隠れ家を襲撃して最重要指名手配者一人を射殺した。この銃撃戦では建物の一部が炎上したため消防車も出動した。また、周辺に駐車していた多数の車が被弾して損傷を受けた。

この二つの銃撃戦の結果、残る最重要指名手配者は僅か三人へと減少した。サウジ治安部隊によるテロ掃討作戦はほぼ慎太郎の予想した通りに進んでいた。サウジの治安体制は強固なものだった。

二二日夜には、治安部隊がメディナ・メッカ高速道路上の検問所で不審な四人組を訊問し一人を逮捕出来たが、三人を取り逃がしてしまった。この三人についてはその後直ぐにメッカにあった彼等のアジトを割り出して強襲し、二人を殺害、一人を逮捕した。この戦闘では治安部隊に死者が二人、負傷

者が四人出た。

久し振りに、スルタンが、また、あのインドネシア人のウ  
ラマー・イスマイルを連れて慎太郎のレジデンスにやってき  
た。相変わらずイスマイルは愛想が良く能弁だった。

「この間はイスラムのことを話し過ぎてしまいました。私  
は、いつもイスラムのことを考えて過ごしていますので是非  
お許し願います。それに、同じ東洋人ということのでついつ  
もより力が入ってしまいました。」

「その後、お元気ですか。アラーのお蔭で、今年のリヤドは  
四月というのに過ごしやすいですね。でも、豪雨、雷雨と異  
常気象ですから体調管理には気を付けてください」

イスマイルの口からは、まるで機関銃のように次から次へ  
と言葉が飛び出してきた。

「私の国では昨年暮れに大地震があつて、大被害を被ったの  
ですが、これもアラーの与えた戒め、試練だと思っています。  
この津波被害には世界各国から救いの手が伸ばされました。

このサウジからも地震の数日後には、一〇〇〇万ドルの支援金が拠出されることになりました。有り難いことです。」

いきなり、話が地震のことに及んだので、慎太郎に寄付でも頼むのかと思ったたらそうではなかった。イスマイルもオスマ同様、津波をアラアの戒めと言った。これがムスリムの一般的な見解なのかもしれないと慎太郎は思った。

次にイスマイルは、今年の二月から四月にかけて実施されたサウジ地方議会選挙のことなど政治の話 시작했다。

慎太郎は、とつとつとまくしたてるその調子にいささか閉口しながら聞いていた。その中に見えてくる批判的な姿勢には慎太郎の心に引つかかるものがあった。それは、外国人からすれば常識的な見解かもしれないが、この国に住むウラマ―としての見解と考えると意外だった。

「一部の報道では、今回の地方選挙はサウジ初の選挙と伝え  
ていましたが、これは正しくありません。実は、半世紀ほど  
前に一部の地方議員を投票で選出したことがあったのです。  
まあ、でも、これは全国レベルの話ではありませんでしたか  
ら今回がサウジ初の民主的選挙で画期的なことと言っても  
良いでしょう。一步前進と言えます。ただ、女性には選挙権  
も被選挙権もありませんし、今回選挙で選ばれたのは地方議  
会議員の半数で残る半数は未だに勅撰です。それに、国会に  
あたるショーラは全員勅撰のままです。さらに最高の権力者  
である国王が、今のようになら、いつまでも世襲制、年齢順で決  
まって良いのでしょうか。サウジでは、基本的には、国王は  
イスラムに基づいて統治しているわけですから、その意味で  
は何の問題も無いのかもしれませんが、ただ、王位継承の正当  
性を判断する基準が曖昧なのです。いや何も無いと言って良  
いのだと思います」

いささか言い過ぎたと思ったのか、イスマイルはスルタン  
の方を向いて頭をかいていた。

「イスマイルさん、そのようにはつきりと言って問題はあり

ませんか」

と慎太郎も心配だった。

慎太郎の素朴な問いには、スルタンがニコニコしながら穏やかに答えた。

「シントロウ、彼はインドネシア人だからね。それに場所をわきまえながら喋っているから大丈夫だよ。王位継承問題については、サード皇太子も十分に承知していらっしやる。今のままで良いとは思っていらっしやらない。改善を望んでいらっしやる。既に、サウド国王には王位継承問題について改善のご意向を具体的にお伝えになった。また、民主化の問題についても、これまでに幾つかの建白書、要望書をリベラルな知識人、イスラム改革派などからお受け取りになっていらっしやる。民主化についても具体的な改善策をお考えだろう。今回の選挙もその一環だと思う。サウジは基本的に急変を嫌うので皇太子も少しずつお進めになるおつもりだと思う」

慎太郎は、これまでスルタンとは政治問題について真剣に話をしたことがなかったしサウジではそのような話題は好ましくないと考えて敢えて避けて来た。サウジのインテリと

してのスルタンの政治に対する意見を初めて聞くことになった。慎太郎はひとつひとつ興味深く聞いていた。

「もちろん、サウジにも現状に不満を持っている人がいる。今回選挙に不満を抱いて昨年一月中旬には改革急進派がデモを行い女性一人、外国人二人を含む二人が逮捕された。また、政府と対立した部族もいた。昨年六月中旬にはタイプで土地の競売があったが、部族はこの土地が先祖伝来のものだとして部族三〇〇〇人が競売会場でデモを行い最後は暴動にまで発展した。その際、不当に逮捕された人々もいた。また、現在、獄中には一万二〇〇〇人もウラマーがいる。その中には単にオサマ・ビン・ラディンに同情するような発言をしただけで捕まったものもいる」

いつもにこやかなスルタンが顔を曇らせながらそう語った。

「ただし、宗教界の大物は改革が少しずつ進むことを期待している。そしてテロのような暴力行為、過激な行動は反イスラム的と思っている。イスラムは基本的に平和を愛する宗教

なのだ。皆、斬首事件のようなケースには憤りを感じている。宗教界ではテロを諫(いさ)めテロリストに改心を勧めている。私も同感だ」

慎太郎は、テロを否定するスルタンの発言を聞いていると、やはり、この間オスマから聞いたスルタンがテロリストの黒幕だという情報は信じられなかった。

慎太郎は、国王のテロリストに対する自首・投降の呼び掛けを理解出来なかったが、今回のテロリストに改心を勧めると言うスルタンの考え方もとても理解出来なかった。相変わらず慎太郎は凶悪なテロリストが改心するようなことは有り得ないのではないかと思っていた。

「スルタンは、テロリストを改心出来ると思っているの」

慎太郎は尋ねてみた。

「彼等は、ジハド(聖戦)という言葉でテロ攻撃に使うけど、ジハドというのは高位の宗教指導者が言うことで、彼等が勝手に使うことの出来る言葉ではない。そのような思い違いは困るが、彼等も敬虔なモスレムであることには間違い無い。むしろ凡庸な普通人よりは良く勉強はしているし頭も良い。」

アラールを信じ来世を信じ、この世の行いにより天国に行けると信じている。そして、彼等は正義のために十字軍と戦い天国に召された幾多のモスレムに強い共鳴を感じている。若い優秀な人間が道を間違えているというのであれば矯正してあげるのも重要なことだと思っている」

慎太郎は、そう聞いても、やはりスルタンの言っていることは十分に理解出来なかった。

また、そんなことを聞くと慎太郎にはまたスルタンが今にもテロリストに共鳴しそうで危うい人物のように思えてきた。そして、あるいはオスマの情報も正しいのかもしれないと思ひ直したりした。

慎太郎の心は右に左に揺れなかなか定まらなかった。

「テロリスト達の、イスラエル・パレスチナ問題、イラク、アフガン、それから中央アジア、ロシア問題に対する理解は正しいと思う。そのような人間がテロを行うというのは全く惜しいことだ。道を取り違えている。ただ、不当に虐げられ、殺害されていった人々に対し、我々が何が出来ているのかと考えると空しいものがあることも事実だ。彼等は、今直ぐに

行動しなければ何も変わらないと知っているのだろう。また、グアンタナモ捕虜収容所でのモスレムの扱いもむごいものだ。彼等はその情報をいち早くより正確に把握している。私も、収容所における捕虜虐待、コーランに対する侮辱行為などは大きな問題だと思う」

慎太郎は、スルタンが徐々に熱く喋っているのをただ側で黙って聞いていた。

そして、慎太郎は、頭の中で、オスマの言った“テロの黒幕”と言う言葉を何度も何度も反芻していた。

“テロの黒幕……、テロの黒幕……”